




審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	甲 第 1233 号	氏名	大園 宏城
審 査 担 当 者		主 査	中村 裕一郎  (印)
		副主査	星野 昭  (印)
		副主査	白濱 正博  (印)
主論文題目 : Effect of Preoperative Fatty Degeneration of the Rotator Cuff Muscles on the Clinical Outcome of Patients with Intact Tendon after Arthroscopic Rotator Cuff Repair of Large/Massive Cuff Tears.			

審査結果の要旨（意見）

本論文は、これまで知られていなかった、腱板修復術後再断裂のない患者の成績不良因子を検討したものであり、術前の肩甲下筋と棘下筋の脂肪変性がリスク因子であることを明確にしている。結果として、術前にこれらの筋の脂肪変性が存在する場合は、単に断裂した腱を修復するだけでは不十分であることが示され、筋移行術などを用いて **Force Couple** 機能の再建を考慮する必要があることを示唆している。本研究は腱板疾患に対する新たな知見となり、今後のよりよい治療方法の選択に寄与する可能性を示したものであり、学位論文にふさわしいと判断される。

論文要旨

鏡視下腱板修復術後に再断裂がない患者の成績不良因子については、これまでほとんど報告されることがない。我々は大・広範囲断裂の鏡視下腱板修復術後に再断裂を認めない患者について術後成績に関与する因子を検討した。

腱板大・広範囲断裂例の鏡視下腱板修復術後に少なくとも術後1年以上のMRIにて再断裂を認めなかった55例について検討を行った(平均年齢: 64.4 ± 9.1 歳、平均経過観察期間: 2.5 ± 1.4 年)。これらの症例を、University of California, Los Angeles score (UCLA スコア) に基づき、Unsatisfactory 群 (27 点以下) と Satisfactory 群 (28 点以上) の2群に分け、結果に影響する因子を単変量および多変量解析を用いて検討した。

単変量解析に続く多変量解析にて、肩甲下筋並びに棘下筋の脂肪変性(Goutallie 分類)のみが有意な因子であり($P=.0004$, $P=.0017$)、ROC 曲線から算出されるカットオフ値はどちらも Goutallier 分類 Stage1 であった。

腱板大・広範囲断裂に対する鏡視下腱板修復術後に再断裂を認めない症例において、術前の肩甲下筋と棘下筋の脂肪変性の程度が Goutallier 分類 Stage 2 以上の症例では臨床成績が劣ることがわかった。